

不登校への家族療法的アプローチの試み

The Attempt of the Family Therapeutic Approach to the Non-attendant

坂 田 真 穂

SAKATA Maho

(和歌山大学教育学部非常勤講師
和歌山県スクールカウンセラー)

竹 田 眞理子

TAKEDA Mariko

(和歌山大学教育学部心理学教室)

2006年10月6日受理

Abstract

In the counseling of the Non-attendant, It is very common that we have the parent clients rather than the students. We, the school counselors, are expected to achieve the results comparatively earlier. It's sometimes difficult to solve the problems with persisting in the personal psychotherapy, because they have the various needs in the school.

In this research, we report on the counseling from the view of family therapy. This case is the counseling with the parents of the non-attendant student who goes to the part-time high school. The school counselor tried to intervene in the family system for reinforcing the couple subsystem, and disconnected the chain causing the non-attendant. We discussed how much the family therapy can contribute toward the non-attendant through this case.

要約

不登校の面接では、不登校生徒本人よりもその保護者が来談することが多く、学校現場では、さまざまなニーズに応じた取り組みが期待されるため、個人心理療法に固執しては問題の解決が困難な場合がある。また、学校におけるカウンセリングでは比較的短期に結果を出すことが求められるため、家族療法など、直接的介入が必要となるケースも少なくない。

本研究は、定時制高校に通う不登校男子生徒の両親とのスクールカウンセリング（カウンセラー：第一著者による）について、家族療法的視点からその過程をまとめ、考察を行ったものである。本研究では、スクールカウンセラーが不登校生徒の両親を対象に夫婦サブシステムを強化する形で家族システムに介入し、また、不登校を起こさせる関わりのパターンを断ち切るよう取り組んだ。その事例を紹介しながら、スクールカウンセラーとして、学校現場でどこまで家族療法的なアプローチが可能であるのかについて考察した。

キーワード：スクールカウンセリング、不登校、家族システム

I はじめに

スクールカウンセラーに持ち込まれる相談では、スクールカウンセラー事業が始まった平成7年から11年経った現在まで、不登校が最も多いように思われる。しかし、不登校に陥った生徒自身が、カウンセリングのために、学校内にある相談室までやってくることは珍しい。特に、自我が育った高校生ともなると不登校生徒自身が学校に相談に来ることはほとんど皆無に近い。そのため、高等学校においてスクールカウンセラーが扱う不登校事例では、生徒本人より、保護者との面接を通して子どもの不登校に取り組んでいくことが多い。また、小中学生と異なり高等学校の不登校の場合は、市町村の支援センターやフリースクールなどが、

高校生を対象外としていることが多く、特に地方では相談できるような機関はほとんど無いため、保護者が学校のスクールカウンセラーを訪ねて来られることが多い。また、学校におけるカウンセリングでは、比較的早期の解決が期待される傾向があり、また、一定の枠組みが守られる通常の心理臨床現場とは違い多様なニーズがあるため、これまでの個人心理療法の枠組みに固執しては対応できない現実がある。

亀口（2005）は、「全国で十三万人を超すまでに増大した不登校児の問題を根本的に解決するためには、従来の個人カウンセリングの理論と技法だけに固執することが許されなくなりつつある」と述べ、家族療法的カウンセリングの技法であるリフレーミングを不登校

のスクールカウンセリングに用いることを提案している。すなわち、不登校生徒を学校という枠から一旦外し、家族関係という枠組みの中に移しかえることで、不登校生徒に家族という安全な居場所を与える。家族を安全な足場にできれば、学校という枠組みに戻ることは、もはや子どもにとっては達成困難な課題ではなくなるという考え方である。中村 (1997) は、家族システムの観点から、「個人」である青年が「社会」へ出て行くとき、家族がその「橋渡し」として機能する重要性を説いており、不登校の青年がいる家族には「橋渡し機能不全家族」が多いと論じている。

河合 (1980) は、不登校の症状を「母子一体感の強さと、父親像の弱さを反映しているもの」と述べ、柏木・大野 (2006) は、「父親の不在」が、実質的に家族に費やす時間やエネルギーが少ないという「量」的問題と、家族に関与していたとしても、妻や子の求めるものとは違うという「質」的問題から論じるなど、家族の問題を不登校の背景にみる研究も多い。

システムズアプローチによる家族療法では、家族を個々の成員が互いに影響を与えあうひとつのシステムとして考え、不登校などの問題を抱えた個人を、家族を代表して問題を表現している人という意味で、IP (Identified Patient; 患者と見なされた人) と呼ぶ。すなわち、家族療法の視点で不登校をみれば、それは家族システム全体の問題であるため、問題を起こしている「個人」へのカウンセリングを行うだけでなく、家族全体への働きかけを行い、家族力動やコミュニケーションパターンに介入していく必要があるとされる。家族システムの問題が子どもの不適応行動や問題行動に影響を与えているとすれば、スクールカウンセリングにおける保護者面接で家族療法的関わりをもつ事が大きな効果をあげると期待できる。しかしながら、第一著者のスクールカウンセリング経験において、不登校の相談に来られる保護者のほとんどは母親のみであり、家族が揃うことや父母同伴で来られることは少ない。

そのようなスクールカウンセリングの実情からすれば、本事例は、毎回父母が揃ってのカウンセリングが行われた珍しい事例であった。また、両親の話から状況の情報収集を行ううちに、息子の不登校にはこの家族システムの問題、特に両親の関係性が何らかの影響を与えているように感じられた。

家族療法では、家族全体をひとつのシステムとみなした際に、その下位システムとして夫婦サブシステムや親子サブシステム、同胞サブシステムなどがあると考え、それぞれのサブシステムには固有の役割や機能があるとされているが、家族システムがうまく機能するか否かは、特に夫婦サブシステムによるところが大きいと考えられている。夫婦の関係が良好ではないため家族システムが機能していないと思われる本事例で

は、カウンセリングを通じて夫婦サブシステムを強化することにより、息子の不登校問題に取り組むという、家族療法的アプローチを試みた。本研究では、両親との面接を通じて、この家族システムの問題点に介入したり、不登校が強化されていく関わりのパターンを断ち切るといった取り組みによって不登校生徒が登校に至った事例を検討しながら、学校における家族療法的アプローチの可能性とその意義を探りたい。

なお、本研究にあたっては、来談者から事例発表の承諾を得てある。

II 事例提示

1. 来談者

不登校の子ども (高校1年生男子O) をもつ40代の父親および母親。

2. 主訴

初回面接を行ったX年10月の中間試験の終了とともに体調不良を訴え、次第に登校しなくなった。

3. 家族

父方祖父母、父、母、姉 (20歳)、本人 (16歳)

祖父母を中心にして家族で農業を営んでおり、日頃、父親はサラリーマンを、母親は家事をしている。姉は社会人。

4. Oの臨床像と生活歴

Oは、農家の跡取り (第二子) として生まれた。母親によると「小さい頃から病弱だったため、大事にしすぎた」とのことであった。Oは、子どもの頃から気が弱く、心配性で、几帳面な性格であった。小学校の頃から、学校で新しい行事や苦手な体育競技があると「出来なかったらどうしよう」というプレッシャーから登校できない事もあったという。また、友人や家族に対しても非常に気を使うとのことだった。

Oは、中学時代より不登校であったが、学校へは行けなくても友人とは遊べるなど、周囲とのコミュニケーションは取れていた。X年4月に、定時制高校に入學し、一学期の中間試験までは毎日登校できていたが、中間試験後、腹痛などの体調不良を訴えて欠席や遅刻が目立つようになり、二学期の始まりとともに親しいクラスメイトが不登校になったのをきっかけに、Oも完全不登校となった。「生きていても面白くない」「人生に夢がない」と頻繁に口にしている。

5. 来談経緯

Oの様子を見かねた両親が、担任を通して、スクールカウンセラーである筆者との面談を希望してきた。Oの両親と学校内にある相談室で、ほぼ2週間に一度、1回50分のカウンセリングが始まった。

6. 問題の見立てと支援目標

中間試験による自己効力感の喪失と友人の不登校を契機にした不安神経症傾向。Oの父親と母親は、祖父母との同居生活やOの教育方針をめぐる口論が絶え

ず、心配性で周囲に気を使いやすいOが、家族内の不穏な空気にエネルギーを消耗したと推測される。Oの不登校の基底には、両親を中心とした家族関係を再構築するといった課題があると思われた。

本事例では、O本人でなく、その両親への関わりを通しての支援となるため、Oの両親を中心とした家族の問題を視野に入れなくてはならない。夫婦というサブシステムを強化することで、心理的に密着した母子の関係にあるべき姿に戻していくことを支援目標とした。

Ⅲ 面接の経過 (X年11月～X+1年3月)

以下の記述において、スクールカウンセラー (以下SC) の発言内容を< >、母親 (以下、Mo) の発言内容を「」、父親 (以下、Fa) の発言内容を『』で表すこととする。

#1では、問題歴や家族構成を中心にOの様子が両親によって語られた。両親は、中学で不登校だったOが、高校入学後に登校し始めたことを非常に喜んでいて、今回の長期欠席はそんな最中の出来事であったため、両親には非常にショックであったようだ。また、中学時代の不登校と比べ今回は、友人や親戚などにも会わず、「ひきこもり」の様相を呈していたこと、Oが「生きていても面白くない」と「死」を連想させる発言をすることも両親の不安に繋がった。

Oの両親が揃って来談したのは、OのMoが車を運転することができなかったため、運転手としてFaが同行せざるを得なかったという経緯からである。定時制高校でのスクールカウンセリングであるため、夜まで相談活動を行っているということも功を奏して、両親とも揃った来談が可能になったといえる。

Faは、スーツや綺麗に磨かれた革靴が、知的で洗練された印象を与えていた。日頃、Oとは、『試験の結果が良ければ1万円やろう』というようなやりとりをしていたようである。しかし、Oの最近の様子はあまり把握できておらず、Oへの充分な関心は向けられていないように感じられた。また、Faは息子の不登校に対し「学校や嫌なことから逃げるなんて、男はあんなのではだめだ！皆辛いことに立ち向かってるんですよ！」と言った。SCは<お父さんはそうやって頑張っただけなんですね。でも、潰れてしまわなくて良かった。戦えないときは逃げなくてはだめですから>と答えた。

Moは、控えめな印象をもつ女性であったが、SCに会うなり、日頃抱えていた不安を堰を切ったように語り始めた。同時に、不登校に苦しむOや自分に関わろうとしない夫への恨みや不満が、抑えきれないという感じで口をついた。祖母とMoがOの不登校が原因で口論になることや、夫が帰宅後まず祖父母の部屋に行くこと

など、家族の問題をSCの前で包み隠さず暴露していくMoに、Faは戸惑っているようであった。しかし、Oに向き合わない父親を責めるMoの発言に次第にFaも言い返すことが増え、ついに二人はSCを前にして口論を始めた。

しばらく言い合うと、二人は、その口論を黙っているSCに気付く、「先生、どう思いますか！」と審判を求めるように訴えた。Oを思う両親それぞれの真剣さにSCはそれまで口を挟むことが出来ずにいたが、<お父さんもお母さんもそれぞれに、O君のことで苦しんでいるんだなぁと思いました>と率直な感想を述べた。それから、家族への関わり方が分からないFaの気持ちや、不登校の息子に一人で向き合っているMoの辛さに共感しながら<こうして定期的にお会いして、O君のことだけでなく、お父さんとお母さんのそれぞれのしんどきも一緒に見つめていきませんか>と提案した。

#2でも、FaとMoは二人揃って来談した。カウンセリングに対して積極的な姿勢でやってくるMoとは対照的に、Faは、照れもあるのか、おそおそとMoの後から入室した。席に着くとMoから、Oが一週間ほど前の夜中にパニックを起こしたことが報告された。Oは、現在の自分の状況や将来への不安に怯えながら深夜両親の寝室にやってきたという。Moは「私は、震えるあの子を抱いておろおろするばかりだった。私もあの子と一緒に泣くしかなかった」とその時の不安を語り、「けれども、この人はそんな私たちを尻目に、隣で背を向けて寝ていたんです！」とFaに恨みの目を向けた。Faが『違う、確かに背中を向けていたが、俺も本当は起きていたんだ』と言うと、「じゃあ、何故助けてくれなかったの！」とMoがずっとくすぶっていた不信感をぶつけた。Faが『自分が起きて声をかけるべきかどうか分からなかった』と答えると、Moは「私はお父さんに助けてほしかった」とつぶやいた。Oのパニックから一週間の間、夫婦は互いへの不信感を抱えながら何事も無かったように日常生活を共にしていた。カウンセリングという守られた空間で、互いの感情を表現できていることを大切にしたいとSCは思った。<お母さんはお父さんに一緒に起きて向かい合って欲しかったんですね。お父さんも本当は心配で、O君とお母さんの様子を背中から聞いていた。でも、お父さんは、その二人にどう声をかけてよいか分からなかったんですね>と、SCはすれ違う夫婦の気持ちの間を言葉で埋めるように介入した。

#3は、#2のあとすぐに冬休みに入ったため、1ヶ月ぶりの来談となった。冬休み中、Oは、腹痛などの体調不良を訴えることが多くなり、救急センターで診てもらったこともあったようである。Moは、Oが、子どもの頃から失敗することをひどく恐れるところがあり、学校でお腹が痛くなると困るからと言って朝食を抜い

ていたことなどを回想した。一方、Faからは、冬休みの間にOと二人で本屋や海へ出かけたこと、またその時のOのようすについて報告された。

SCは、前回のカウンセリングの後、両親がOの子ども時代のことを思い出したり、Oの気持ちについて考え始めていることに気がついた。また、これまでは、Oの成績が良ければお小遣いをあげるという「モノ」を介したFaの関わりが、#2のやりとり以降、Oと出かけたりOとともに過ごす関わりが変わっていることを知り、SCは、思春期の息子と関わろうとするFaを心理的に支援するよう努めた。しかし、FaがOと外出する際にはMoは同行せず、カウンセリングでは、Faが二人の外出時の様子を話すのをMoは他人事のように聞いていた。一方、Faは、Moの報告する内容をカウンセリング内で初めて聞くようでもあった。SCは、FaがOに向き合い始めたものの、未だこの家族の関係は”FaとO”・”MoとO”という二重構造になっており、家族が一つに統合されていないと感じた。しかしながら、最近Oが学校からのプリントや数学の教科書を広げ始めたことを報告するMoは、無関心を装いながらも密かにFaの取り組みを応援しているようにも見えた。

また、二人はこれまでOに黙って来談していたが、この回からは「学校へカウンセリングに行ってくる」とOに話してやってくるようになっていた。Oは、両親の行き先が学校であっても反対したり不機嫌になることはなく、「僕が留守番しといてあげるよ!」と両親がともに出かけることに協力する様子を見せていた。

#4では、Oが歯茎からの出血を白血病ではないかと心配したり、腹痛を盲腸炎ではないかと訴えることが多く、何度か病院に行ったことが報告された（いずれも検査の結果に異常はなかった）。Oの体調不良は、Oの不安や葛藤が身体に表現されたものと思われるが、「Oが病気になることには一体どのような意味があるのだろう。」とSCは思った。家族の一人が重い病気になることで、口論が絶えないばらばらの家族がまとまりを取り戻すということが、世の中ではよくあることだとSCは考えていた。

カウンセリングの前夜、Oは”明日学校に行く”と両親に話していた。両親は半信半疑ながらも、かすかな期待を抱いてこの日の朝を迎えた。しかし、家を出る段になって、やはりOは登校することが出来なかった。Faは、仕事でOより早く家を出るため、仕事帰りに妻と共にカウンセリングに向かう道程で、その日Oが登校できなかったことを聞かされたようであった。Moは、Oの登校を期待した分落胆も大きかったのか、ひどく肩を落としていた。Faは『実は今日、アイツどうだったのかなって仕事に何度も携帯を見てしまいましたよ』と、敢えて明るい感じで“参ったなぁ”というポーズをとった。しかし、FaもMoと同じように落ち込んでいることは、SCの目にも明らかであった。そんなFaに

そっと言葉の毛布をかけるようにしてMoが、「あなた（Fa）に（登校できなかったと）伝えるのがとてもかわいそうで連絡できなかった」と伝えた。するとFaは『いや、お前も辛かっただろう』と、Moに言葉を掛け返した。

カウンセリングを開始した頃、FaはOの不登校に対し、『男はあんなのではだめだ!』『皆つらいことにも立ち向かっているのに!』と受け入れられないようであった。しかし、#5では、『私も、恥ずかしい話、脂汗をかきながら何とか仕事に行ってたことがあるんです。だから、アイツの気持ちはわかる』と少し恥ずかしそうに語った。Moは隣で、Faの告白を目を真っ赤にしながら聞いていた。Moの視線から、初めてSCに会ったときにFaに向けられていた恨みのまなざしが消えていることにSCは気付いた。そのやわらかなまなざしに、SCは、MoがこれまでFaとともに生きてきたということを改めて実感していた。SCがくお父さん、なんか変わりましたね>と声をかけると、『戦えないときは逃げなくてはだめだと先生(Th)はおっしゃいました。これまでの私は、そういう考えが出来なかった。でも、そういうことが少しずつ分かってきたんです』と答えた。また、『ここで妻と話ができて良かった。家で二人だったら言えてないことがたくさんあったでしょう。妻の話もここでは冷静に聴けた』と笑った。Moは「お父さんは神様じゃなくてもいいんですよ。Oもきっと、そんな普通のあなたを知りたいはず」と言葉を掛けた。それは、これまでであれば、SCが掛けたであろう言葉であった。二人の間で、SC無しでもコミュニケーションが取れ始めたことを感じた。

#6は、春休み前の本年度最後のカウンセリングとなった。Oが不登校になる直前に、学校に来なくなったクラスメイトからOに電話があり、電話に出てなにやら話していたと報告された。また、体調が悪いMoにOが通院を促し、自分もそれに付いていくなど、自発的に外出することも増えたようである。Moに「高校に入ってから人目が怖くなった。僕、被害妄想なのかなあ」と自分の内面について話したり、「春からまた学校へ行けるかなあ」と希望を持ち始めているようであった。

SCの任期が1年ということもあり、来期は別のカウンセラーが来るのか、それとも来期のSCの派遣は無いのかすら分からないまま、本年度最後のカウンセリングを終えることになった。SCは、この事例を次のカウンセラーに引き継ぐよりは、今は担任に戻していく方が適切なのではないかと感じた。Oの両親の意向も、次のSCへの引継ぎは必要ないとのことであったため、本事例はここでひとまず終結することとなった。

年度が明けて、結局、同高校に配属されたSCは、4月からOが学校に登校し始めたことを担任から聞かされた。新学期が始まる前には、両親とOが、仲良く三人

で学校を訪れたという。Oは、長欠期間が数ヶ月だったためか、ぎりぎりのところで進級することが出来た。担任から、Oとともに不登校になったクラスメイトが留年になったことを聞かされて、Oは自分も進級したくないと訴えたようだったが、結局進級した学年の中で居場所を見つけたのか、その後も毎日学校に通っている。

IV 考察

(1) 家族システムから不登校を考える

Oの家族は、父方祖父母と両親、姉とOという3世代が同居している。O家族が住む地域は、昔からの農家が多い地域で、外部からの移住者も少なく、どちらかというと閉鎖的な地域である。また、昔ながらの隣人付き合いに加えて、本家を中心として近隣に住居を構える親戚との付き合いも多いと思われた。そんな「家」制度が色濃く残った農家の跡取り息子である父親は、仕事から帰宅すると妻や子どもの元へ帰る前にまず両親の部屋に立ち寄るなど、両親との関係が相互依存적であり、心理的距離も近いようであった。そのような「家」へ嫁いだ「嫁」である母親は、夫とその両親との間に入っていくことができず、孤立感を感じていたのかもしれない。その孤独を埋めるように、母親はOを過剰に抱え込むような関係性を形成していったと思われる。Oもまたこの家の跡取りであるため、同居する祖父母はOに強い関心を寄せるが、母親は「(不登校になった)Oに干渉してこないでほしい」と祖父母に直接訴えることもあった。祖父母の干渉への拒絶は、一見Oをかばっているように見えるが、心理的には夫の代理であるOを母親が抱え込むもうとしての発言ともとれる。母親とOとの一体感が増すとともに、両親の夫婦間の感情的絆が希薄になっていったのであろう。

西尾(1999)は、子どもの成長における両親の関係について、両親が家族の中心であり、両親の関係が安定していれば子どもの心も安定すると述べている。また、村瀬・伊藤(2006)は、父母の離婚は子どもにとって大きな心理社会的ストレスであり、年齢相応の心的バランスを失わせ、年齢に見合った発達を阻害してしまう危険があると指摘している。

これらの研究からも、家族における夫婦サブシステムの在り方が子どもの社会適応や発達に多大な影響を与えていることが伺える。そのため、SCは、夫婦サブシステムの強化を行うことによって、Oにとって家庭を社会に出るための安全な足場にすることで、Oが学校に戻ることに繋がるのではないかと考えた。

妻の経済的地位と夫の妻への共感的コミュニケーションについて、平山・柏木(2000)は、妻の経済的地位が高いほど夫は妻を対等に認めるため、コミュニケーションにおいても共感的態度を示すが、専業主婦

の場合、妻が一方的に喋り夫は聞いていないといったコミュニケーションが増えると述べている。伊藤・池田・川浦(1999)は、妻にとっては、夫との十分なコミュニケーションや、そのための会話時間の確保が非常に重要であり、会話時間が確保されているという認知は夫との情緒的な関係を強めると述べており、女性にとって夫婦の会話がもつ心理的意味は大きいと考えられる。O一家の夫婦サブシステムを強化するために、父親のOへの関わりを支援しながら、夫婦の会話を変えていくことを心がけた。

夫婦のつながりが強化されれば、母親が孤独を感じることは減少し、孤独のために息子を過剰に抱え込むことは無くなるのではないかとという予想のもと、本事例では、両親のコミュニケーションの間にSCが介入し、相互理解を深めながら二人のコミュニケーションパターンを変えていくよう努めた。両親サブシステムを強化し、Oにとって家族が社会との「橋渡し」になり得るものとしたことが、母親との一体感からの自立や登校を促したものと考えられる。

(2) 家族システムへの働きかけ

村上(2006)は、比較的短期間での解決が望まれる学校では、目の前に来談した生徒もしくは親が困っていることに焦点を当て、その問題を解決するために必要なその人を含んだ連鎖パターンを見つけ出し、その連鎖を断ち切る介入をおこなうという方法が最も実用的であると述べている。

Oの家族における問題の連鎖パターンは、「Oが不登校になる」→「親がストレスを感じる」→「父親が問題から逃避する」→「孤独になった母親がOを抱え込む」→「Oの社会適応は未熟になる」→「Oがさらに不登校になる」といった連鎖のパターンがみられた。

この場合の「父親が問題から逃避する」ということについては、Oの父親がOと共に過ごすことを避け、「モノ」を介した関わりに逃げていたことや、Oの前では弱い自分は見せず、完璧な父親を演じることでOに向き合うことから逃避していたことがそれにあたると考えられる。斉藤(2006)によると、多くの父親が思春期以降のわが子に接する際強い不安を感じており、その結果、多くの父親がそうした問題に直面することを避けて仕事などへ逃避している。その一方で、わが子と向き合おうと試みる父親の多くは、自分の中にある凡庸な父親のイメージに即して、望ましい父親像を演じようとする述べている。また、共働き家庭の父親に比べて、専業主婦家庭の父親のほうが育児についての関心が低く、特に男児への父親の関わりが低いことも報告されている(尾形,1995)。

父親が逃避していたのはOからだけではなく、妻の子育てをサポートすることにも文字通り「背を向けて」いたといえる。数井・無藤・園田(1996)によると、母親の心理的状態や子どもへの行動・態度は、夫との

関係のありようと密接に関連しており、母親の育児不安が子どもに与える悪影響は、夫婦関係が良く夫からのサポートがある場合には低減されることが報告されている。また、誰からも評価されることのない無職の妻にとって、夫からの評価やサポートはきわめて重要であるという研究もある(稲葉,1995)。夫からのサポートや評価が得られないまま、Oの母親も孤独を深めていったのかもしれない。そこで、上記の連鎖パターンから「父親が問題から逃避する」という部分を消去することで、この連鎖を断ち切る必要があると考えられた。そのため、SCは#2の面談において、母親が父親の関わりを必要としていることを母親の言葉によって明らかにさせ、#3以降、父親が息子に向かい合い始めると、SCは父親のOへの働きかけに支持的に関わることで、父親の不安を軽減するための心理的支援を行った。

初めは父親の変化に冷淡な素振りを見せていた母親も、#4以降は次第に父親に対して、子育てのパートナーという見方を深めていったように思われる。

V おわりに

本研究では、定時制高校に通う不登校男子学生の両親とのスクールカウンセリングについて、家族療法的視点からその心理療法過程をまとめ考察した。長男の「不登校」がこの家族システムの問題であると捉えるならば、彼が登校するようになるにはこの家族システムそのものに働きかけることが最善であると思ったからである。夫婦サブシステムを強化する形で家族システムに介入し、また、不登校を起こさせる連鎖のパターンを断ち切るよう取り組んだことは、約4ヶ月の取り組みの後に、夫婦関係の改善とOの登校という形で実を結んだ。学校におけるカウンセリングには、比較的短期の解決が望まれる上、不登校の学生自身が来談することは少なく、その保護者との面接が多いという特徴がある。本研究は、そのような特徴をもつスクールカウンセリングでの不登校面接において、家族療法的取り組みを行うことの意義を問うものとなった。

しかしながら、何故か筆者にはどこか後味のすっきりとしない事例でもあった。それは、主訴である「不登校」が「登校」という形を一応迎えたものの、両親が何を成し遂げたことによってOの不登校が消失したのか両親と確認する機会を持てなかったことによると思われる。河合(1970)は、主訴である問題や症状が消失したあと、カウンセリングによってクライアントが成し遂げた心理的仕事の確認、つまり悩みの本当の意味の確認をして治療を終える大切さについて述べている。

さらに、この家族のシステムにおける祖父母と父母

の世代間境界の問題や、姉とOの同胞サブシステムの問題に取り組むことができないまま、年度末を迎える形で終結させなければならなかったことも非常に残念であった。一年という限られた任期の中で、スクールカウンセラーとしてどこまで深く関わっていただけるかが今後の課題だと思われる。

本研究では、スクールカウンセラーとして、学校現場でどこまで家族療法的なアプローチが可能であるのかについて考察を加えてきた。しかしながら、核家族化が進み、母子家庭や父子家庭、あるいは両親ともにいない家庭が少なくない現代、学校現場ではどのようなアプローチが可能なのかを検討することは重要である。

学校には、校長・教頭といった管理職教師、担任や教科・クラブ指導を担当する教師、養護教諭やスクールカウンセラーのように学生への支援を主に行う者など、さまざまな立場から学生への働きかけを行っており、また、教師だけではなく、生徒同士も互いに影響を与え合っている。そのシステムは祖父・祖母、父、母、兄弟姉妹で構成される家族システムと似通った部分があり、このような意味では、学校を家族と同じく一つのシステムと見なすことが可能ではないかと思われる。したがって、今後は、学校システムに対しても、家族療法的アプローチを応用させる取り組みを行っていきたい。

参考文献

- 稲葉昭英 1995 有配偶女性の心理的ディストレス 総合都市研究,56,93-111
- 伊藤裕子・池田政子・川浦康至 1999 既婚者の疎外感に及ぼす夫婦関係と社会的活動の影響. 心理学研究,70,17-23
- 亀口憲治 2005 家族療法的カウンセリング 駿河台出版社
- 数井みゆき・無藤隆・園田菜摘 1996 子どもの発達と母子関係・夫婦関係: 幼児を持つ家族について. 発達心理学研究,7,31-40
- 柏木恵子・大野祥子・平山順子 2006 「家族心理学への招待」 ミネルヴァ書房
- 河合隼雄 1970 カウンセリングの実際問題 誠信書房
- 河合隼雄 1980 家族関係を考える 講談社現代新書
- 村上雅彦 2006 学校臨床における事例 亀口憲治(編著) 家族療法 ミネルヴァ書房 pp.141-155
- 村瀬嘉代子・伊藤直文 2006 家族の変容とところ—ライフサイクルに添った心理的援助 新曜社
- 中村伸一 1997 家族療法の視点 金剛出版
- 西尾和美 1999 機能不全家族 「親」になりきれない親たち 講談社
- 尾形和男 1995 父親の育児と幼児の社会生活能力—共働き家庭と専業主婦家庭の比較. 教育心理学研究,43,335-342
- 斉藤環 2006 家族の痕跡—一番最後に残るもの 筑摩書房